

ナイル

1984年11月にイランを再び訪問してから帰国すると、異常な高熱に見舞われた。「セーシェル諸島でデング熱、インドネシアでアメリカ鉤虫。あなたはまめに奇病を

私の履歴書

子 恵 岸

28

娘が念願のリポーター役

酷暑・砂嵐：裸族の姿に感動

「冒険心はしばらく出番禁止です。予防注射が必要な熱帯は絶対にダメ」と念を押された。生来丈夫な私が回復するのに1カ月近くかかり、娘と珍しく平穏な数週間を過ごしていた時、プロデューサーの彦由常宏さんが膨大な資料を持ってパリまで来た。大河ナイル最初の一滴を訪ねるといふテレビのルポ番組だった。「予防注射を打つのね？」

「ちょっと！うちの娘、牛のおしっこで顔を洗って、牛ふんを塗りたくるの？」

「マラリアにかかるよりは顔や体に牛ふんを燃やした灰を牛尿でこねて塗りたくる。これが彼らのマラリア対策だった。朝は牛のお尻に頭を突っ込み、尿で顔を洗う。」

「この裸族はスーダン南部のジュバにいます。お嬢さんに行っていたきたい」

「ちょっと！うちの娘、牛のおしっこで顔を洗って、牛ふんを塗りたくるの？」

「マラリアにかかるよりは

拾ってくる人ですからね」

イヴ・シアンピと親しかった医師が抗生物質を処方しながら「ほかに飲んでる薬は」と聞いてくれた。「ありません」と私は即答したが、何十年も常用している睡眠薬を失念するお粗末ぶりだった。後遺症がひどいので医師に

「2カ月ほどの間隔で7種類9本の予防注射です」

熱帯、特にアフリカはダメと医師に言われたのが1カ月前のこと。しかし、ナイルやアフリカの奥地には抗しがた魅力があった。野町和嘉さんの写真集「バハル・アフリカが流れる」の躍動する野生の迫力に私は驚嘆していた。水ぶくれのような瘡痕装飾を施した全裸の男女。漆黒の

「蚊取り線香やミネラルウォーターを用意しますから」

「それでも私は反対した。」

「スーダン南部のジュバには反政府ゲリラが跋扈しているのよ。フランス人技術者も人質になっているのよ」

「ママン、親バカの誇大な想ね。私は名もなく技術もな

い学生よ。持参金をつけても人質に取ってこれないわ」

娘は現実的な発言をする。

ナイル川の最初の一滴は標高5109mのスタンリー山から滴り落ちる。地中海に注ぐまで全長約6700km。酷暑が去り、砂嵐が襲来するま

た。神の水と崇められるナイル川の水を飲んでおなかを壊し、熱も出たが、娘の顔は生き生きと輝いていた。

「人々に恵みをもたらす大河」と古代人が言ったナイルはとてつもなく偉大だった。流域に暮らす人々の生きる姿に感動した。昼は灼熱のセ氏50度近くまで上がるが、夜は凍えるほど気温が下がる過酷な環境。45日間の撮影でお風呂にありつきたのは4回だけ。

髪の毛は砂の粒子で固まってクシも通らず、肌はカサカサにひび割れた。けれど心の芯のようなものがそれまでの私を蹴散らし、頑丈で分厚い熱気のある気配に入れ替わった。

映画というフィクションの世界から、私はノンフィクションの世界の住人になったのだ。

（女優）



裸族をレポートする娘（スーダン南部）